教職あらかると

考えさせられた

北野武 著「新しい道徳」

後藤　忠　2021.12.21

「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか

道徳の教科化が世間の話題になり始めた2015年9月、こんなキャッチコピーで「新しい道徳」という本が著者の顔写真と一緒に新聞広告に掲載された。著者は北野武、あの有名なお笑い芸人ビートたけし、タケチャンマンである。

私は昔から彼の隠れ(？)ファンだったが、それは同い年だという理由からではない。彼は映画俳優としても、映画監督としても優れた才能を有し、数々の国際映画賞を受賞してきたし、彼が書くエッセイは世の中の諸事を鋭く切り裂き、的を射た論旨は実に鮮やかで、しかもどこか温かく、なるほどと納得させられることが多い。若手芸人たちからの人望が厚いのも、そうした彼の人柄ゆえのことであろう。まさに「天才」と言うべき人だと思う。

その彼が「道徳の教科化」について語るとは夢にも思わなかったので、驚きと興味から早速大手通販サイトで本を購入した。

新しい道徳　北野武　幻冬舎

9月10日の初版から9月25日にはもう第3刷、20万部を突破したと書いてあった。それだけ大勢の国民に読まれているわけである。

読み始めると、頭にくることばかりだった。（「**はじめに**」～「**第1章 道徳はツッコミ放題**」）

お笑い芸人の本領発揮というか、言いたい放題、毒舌三昧のワンマンショウで、苦笑すら出ない。苦虫をかみつぶしながら読んだ。

確かに、彼が指摘することは、全く的外れの揚げ足取りではなく、所々核心を突いているというか、かすっているというか、その通りだと思うところがあるだけに、余計に腹が立った。

こういう本を読む際、私はいつも「同感、共感」の部分にマーカーでラインを引く癖があるが、この本に関しては「ラインなし」のページが結構長く続いた。

ところが、「**わたしたちの道徳**」1、2年生用（文科省）の二宮金次郎の話あたりからラインは徐々に増えていく。（**ゴチック**は引用文）

こう言っちゃ悪いが、文章に熱がない。二宮金次郎のことを、子どもたちに知らせたいという気持ちが伝わってこない。

大人が心にもないことをいっている限り、子どもには伝わらない。道徳っていうのは、そういうものだと思う。他の教科のように、理屈で教えられるものではない。

道徳の時間は、本音で話さなければ、教える教師にとっても、子どもにとっても退屈で、無駄な時間でしかない。

本の引用が多過ぎると著作権に抵触する恐れがあるので控目にするが、この本を読んであらためて考えさせられたことが幾つもあった。

教師一人一人が自分の頭でしっかり考えて、本音で子どもに道徳を語れ

この本が一貫して言っていることは、このことだと思う。

教師が自分で考えなくなったら、教師はもういらない。パソコンでもロボットでも十分教師の代わりはできる。

「なぜ親切が大事なのか」、「なぜ真面目に勉強しなくちゃいけないのか」、「なぜ友だちとけんかしちゃいけないのか」、「なぜ夢や大志を抱かなくちゃいけないのか」、「牛や豚を殺していいのに、なぜ人間を殺しちゃいけないのか」など、子どもが抱く素朴な疑問に社会通念や人から借りた常識からでなく、教師が自分でしっかり考えて答え出さなくてはいけない。そうしないと子どもの心に道徳は届かないし、響かない。道徳とは何か、人はなぜ道徳を守らなければならないのかということをまず教える側がよく考えることだ。

道徳科学習指導案で言えば、**主題設定の理由**

の⑴ねらいとする道徳的価値についてを徹底的に自分で考えることである。教科書（教師用指導書）の丸写しは教師にとっても、子どもにとっても何の意味もない、無駄なことである。

教師や親にとって都合のいい子どもを育てる道徳教育をしてはならない

このことには異論がないと思うが、案外無意識の内にやってしまいがちである。

例えば、「意地悪をした、されたの応酬で学級の雰囲気がよくないから B[親切、思いやり]を重点に指導計画を立てよう」とか、「努力や辛抱が続かず、困難に負けてすぐ挫折してしまう子が多いから A[希望と勇気、努力と強い意志]の指導を充実しよう」とか、「学級の人間関係が希薄でまとまりがないから B[友情、信頼]の指導に力を入れよう」などの**指導観**がまさにそれである。

道徳科の学習は「今日や明日の生活」を改善するための学習ではない。子どもの内面の深いところを耕し、磨き、子どもの 10 年先、20 年先の生き方に寄与する学習をする時間である。

生活上のトラブルを解決しようとしたり、教師や親にとって都合のいい子どもを育てようとしたりする下心満載の指導はしてはならない。

しかし、子どもの「今日や明日の生活」をよくするための指導は絶対に必要である。

その指導は、教師が学校の教育活動全般で常にリーダーシップを発揮し、道徳的実践の指導の徹底を図り、全ての子どもの安心と安全、平和と幸福を保障してゆかなければならない。

道徳科万能主義はいけない。

友だちが一人もいなくったって、幸せに生きている奴はたくさんいる

この本で私が最も心に残ったのは、これである。その箇所を引用（抜粋）し、紹介することをお許し願いたい。

道徳の教材でもうひとつ気になるのは、やたらと友情の価値を押しつけるところだ。

いじめの問題があって、それをなんとかしようということなんだろうが、浅はかな考えだ。

「友だちがいると楽しい」とか「友だちに助けられた話」とか「友だちがいるとこんないいことがある」とか、例によっていろんな友だちの効能が道徳の教材には書いてある。

まず、それは打算だろう。本当に友だちがいる奴が書いたのか。

友だちを助けるのは、いつか自分が助けてもらうためではない。友だちが好きだから助けるだけのことだ。友だちを助けることで自分が不利益をこうむったとしても、それでも助ける。それがほんとうの友だちってものだ。

友だちがいてよかったなっていうのはあとから思う話であって、友だちなんてものは何かの目的のために作るものではない。

だいたい、役に立つからって友だちを作るような奴と誰が本気で友だちになりたいだろうか。

ところが道徳の本を読んでいくと、友だちがいないと幸福になれないような気分になる。友だちが作れない人間は、まるで問題があるかのようだ。

そういう教育をしているから友だちを作ることが強迫観念になって、何とか仲間はずれにならないように涙ぐましい努力をする子どもが出てくる。子どものイジメが増えた原因も、案外そんなところにある気がする。

以上